

火星



平成20年8月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

べつべつのももの夫と食ぶ西日かな

男山の風にうどんげ孵りけり

縛りある屋台に増ゆる早星

手花火にぶらんこの板浮みけり

鉤豆の風音なりし昼寝覚

大仏殿の闇に日傘を脇ばさむ

献血車まづ大葭簀立てにけり

秋立つや海星はりつく海星の上

だんご虫掃いて迎火仕度せり

大黃の藪に雨ふる盆の昼

太白星

柳生千枝子

新酒汲むまた一年を生き伸びて
孤独長し小菊に屈みぬて夕べ
清水汲む小さきアルミのカップなり
無造作に酌してくれぬ新走り
菊の前深息をして去らんとす
稟として白菊月の夜を香る
白鳥の如き秋雲崩れつつ

杉浦典子

月光にあす蒔く棉の種浸す
分水嶺の北の田植のはじまりぬ

梅雨の月鷺の留まりし枝たわむ
新緑や男ともだちひとり減る
消防署に消防車ゐる夏つばめ
新緑を駆け幼なさの消えにけり
袋角風の渡りし水を飲む

浜口高子

乳母車の空^ラ新緑の登山口
孔雀よぎりし竹落葉ひとしきり
憲法記念日干し俎を裏返す
竹落葉に足の沈みぬ人工島
万緑の底へつつひの爆ぜにけり
火吹竹へ新樹の息を絞りけり
円座よりなんぢやもんぢやの花盛り

火星作品

山尾玉藻選

蛇泳ぐおのれの水尾を消しながら
明石 戸栗末廣

前山に雨意のちかづく実梅かな

雨粒のいよいよよし菖蒲刈

濯ぐ手の水よく切れる花檣

笹舟のすぐ水に乗る子供の日
八幡 奥田順子

穴塞ぎをれば筍ながしかな

花ふくべ母のベッドが空いてゐる

猪牙舟の動くともなし夕薄暑

ゆるやかに紐囲ひされ虞美人草

水底に石畳ある賀茂祭

種俵やさしき山の明日香に
神戸 深澤 鱧

風中にひとり目覚めし磯遊

苺売明日香の薨遠見せる

職退いて八十八夜を漱ぎをり
すかんぽの花の裏くる賀茂祭
神護寺へ燈の始めの河鹿笛
頼朝公に息かかるほどお風入
目録も漢字ばかりやお風入
薄暑来ぬ薬師如来の肩の辺に
叡山へ鷺流れゆく麦嵐
老鶯の啼ける全身見たりけり
北国の余花や赤子を地に下し
夏の灯の茫と温泉街の菓舗
継ぎし家に挽ぐ青梅のつめたかり
梅雨兆すこけしろくろの削り屑
鮎の水替へゐるこ糸の端午かな
葉桜の奥に牛買ひ来てをりし
母の手を低く引きけり花菖蒲
赤松の肌を引く梅雨入かな
山音に角まはしけり蝸牛

大和郡山

城

孝子

宝塚山本耀子

八幡大山文子

選のあとに

山尾 玉藻

蛇泳ぐおのれの水尾を消しながら

戸栗 末廣

蛇が鎌首だけを水面に出して滑るように泳ぐ様子は、余り快いものではない。しかし「蛇」にしてみれば、生きぬく為致し方ない行為であり、悠然と水面をくねらせて行くように見えても、懸命に泳いでいる筈である。掲句、蛇がくねくねと水尾を引いてゆく様子を「おのれの水尾を消しながら」とイメージシフトし、「蛇」の実体に迫っている。嫌われもの身で、天敵からは常に逃げ果さねばならぬ「蛇」の哀れさを、巧みな擬人法で表出し得ているからである。

穴塞ぎをれば筍ながしかな

奥田 順子

何の目的で、どのような穴を塞いだのか、などの詮索は無要であろう。「塞ぐ」は鬱ぐとも書く。因つてこの句の場合、穴を塞ぐ作者の晴々としなない思いを汲み取りさえすれば良いのである。季語「筍ながし」が即かず離れず効を奏して、何とはなく含みのある句柄としている。

風中にひとり目覚めし磯遊

深澤 鱧

うたた寝や屋寝から目覚めると、独り置き去りにされたような、えも言われぬ淋しさを覚えるものである。作者は「磯遊」に疲れ、砂浜や岩影でつい眠ってしまったのであ

う。独り汐風に吹かれ、遊びに興ずる他の人たちの声を遠くにする姿は、いかにも淋しそうである。

頼朝公に息かかるほどお風入

大山 文子

京都神護寺が焼失した時、その再興に尽力したのが源頼朝であった。虫払いには、教科書などでお馴染みの衣冠装束の座像「頼朝像」が、床の間にうやうやしく吊るされる。興味津々の作者はその座像に思いきり近寄り、食い入るように眺めたのであろう。座像は紛れもない国宝、しかも等身大である。「息かかるほど」の措辞に諧謔がある。

老鶯の啼ける全身見たりけり

山本 耀子

山中などで「老鶯」が余りにも身近に鳴いて驚くことはあつても、その姿を見ることは、なかなか難しい。作者は思いがけずその姿を目撃したのである。十七文字全てが思わず口を突いて出たような表現であるが、感動に溢れている。殊に、「全身見たりけり」の全身が卓抜しており、力強く張りのある声を挙げる「老鶯」そのものを描いて余りある。

葉桜の奥に牛買ひ来てをりぬ

城 孝子

家族が愛情を籠めて育んできた牛が、買われて行くのである。喜ばしい晴れの日であるが、寂しさに胸が塞がる日でもある。季語「葉桜」には陽と陰とに相俟つ微妙な趣きがある。そのような「葉桜」の、しかも奥と強調して、作者は揺れる心情を際立てている。

(以下略)

恒星圈

大東由美子

新緑の陰に入口ありさうな
少しづつにぎり寄りけり鉄線花
花擬宝珠水面にあふる波紋かな
新茶くむ駿河の消印なら良ろし
花ゑんどう微熱ののんど渴きけり

坂口夫佐子

高尾豊子

万緑や新幹線がまつしぐら
竹秋の山へ入りたる雨女
幼な子の臍のこんもり緑の夜
夫とをれば眠たかりけり芥子の花
うなぎ屋の煙のとどく七夕笹

年金のたより来著莪の花に雨
カーネーションの消印押され届きたる
新緑や銀杏城は身を反らし
時鳥の声聞き分ける夏帽子
硬軟を合せ持つ人クレマチス

城孝子

高松由利子

大阪に蛇の宙ある端午かな
病室の針がねハンガー明易し
滝壺の魚影くはしく梅雨に入る
蜘蛛が足こまかく使ふ朝ぐもり
山の陽の斜にさしゐる蛇の衣

笈掛石傾いでゐたり南風
竹落葉踏んで人より遅れをり
赤はらのひるがへり空乱しけり
ゆふかげりして牡丹の色ませり
かかげある絵馬に来てゐる大西日

獅子座

山尾玉藻推薦

岩井ひろこ

繭の花零るる先に用のあり
内緒ごと増えて忘れし花ゑんど
青嵐 駅より坂の始まれる
中京の辻で出会ひし夏つばめ

渡邊美保

朝より毛虫あやめて水打つて
でで虫の先に来てゐし木のベンチ
明易の海を見てゐる帰郷かな
そろへたる足指青葉木菟の鳴く

天谷翔子

まつ白な皿をパセリのために買ふ
薔薇のアーチくぐりてきたる卓に薔薇
牡丹のいま崩れたる空気なり
耳をすませば滴りの太りきし

南浦輝子

瑠璃いろの蜥蜴の瑠璃にひるみけり
鯉幟はためく家の子を知らず
老猫は遠くに行かず若葉風
横須賀線青葉若葉の迫りくる

奥田順子

隣家を隔つ十葉花ざかり
曲るたび傾くバスや夏の雲
松蟬やクレパスの黄の見あたらぬ
麦秋や画布に祈りの朱き色

白数康弘

滝を見て身の内に冷えまとひけり
翳りてはなほ滝音の高まりぬ
滝不動茶碗の水のなみなみと
一抹のさみしさありぬ滝落ちて

中野八重子

武具飾の櫃の底より魔除護符
桐の花一憂いつも身に添へる
夏山へ登る話の外にあり
木苺の白一面や母のこと